相撲技術名称の変遷

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 真柄, 浩 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/4978

明治大学教養論集　通巻210号　体育学（1988）pp. 69—88

相撲技術名称の変遷

真柄　浩

はじめに

相撲の勝負そのものを，節会相撲の頃から取組，一番，一手などと呼んでいた。この一手は，次第に相撲の技術を指すようになり，さらに決り手，極り技の意味合いを持つようになって来ている。古く源平の頃より，四十八手などと言われていた。はじめは，決まり手のみに限らず，相撲の技術の総称として使われていた。次第に決まり手としての四十八手に変遷して来ている。四十八手は四十八願，四十八夜，四十八鷹，四十八棚などと同様に，多数のという修辞語として使われていた。それが四十八を基本としての技の取捨選択，開発研究にと繋がって行ったのであろう。

ここでは古今の相撲技術名称の収録を第一義的に捉えた。次いでその変遷に触れ，いくつかの技に注目した。さらに「山家集」「節用集」の時代的な背景に考察を試みた。

技術名称の出典とその数

相撲技術の名称を収録するに当り，次の出典資料に従った。（　）内は引用した技術数である。「新猿楽記（6）」，「山家集（2）」，「古今著聞集（1）」，「源平盛衰記（5）」，「異本曽我物語（17）」，「異制庭訓往来（2）」，「節用集（12）」，「竹齋物語（9）」，「相撲強弱理合書（49）」，「南部相撲取組（126）」，「身構五種取組（119）」，「相撲伝書（15）」，「相撲鬼拳（56）」，「相撲大全（146）」，「相撲

大全（捔力秘要抄・63)」,「相撲大全（手捌八十二手・82)」,「相撲大全（手砕八十六手・82)」,「相撲図式（60)」,「上覧相撲記（49)」,「相撲隠雲解（50)」,「日本相撲奨励会資料（46)」,「大正の四十八手(48)」,「一味清風（59)」,「相撲新書(46)」,「相撲道綜鑑（144)」,「すもう（72)」,「アマチュア相撲（78)」,「真説相撲見聞録（73)」,「日本相撲協会資料（155)」,「青少年の相撲指導要綱（72)」の以上30種である。順序は出版・成立年代順とした。

可能な限り原本から引用したが，古い年代の相撲技術の紹介をした書籍からの孫引き，雑誌「相撲」，その他，日本相撲協会の資料などからも引用した。出版・成立年代は原本の奥付に従った。2版，再版，新版などあるものも初版，元版の年代を採用した。孫引きの場合には，著者の解説する年代に従い，出版あるいは成立年代の不明のものは，国書総目録等で年代を推定した。宝暦年間や室町時代などの場合はほぼ真中を取った。個々の出典から収録された相撲技術の名称の総数は重複したものも含め，1,744であった。

そのひとつ一つの技をカード方式により整理分類し，同じ名称の技として認められるもは，すべて一つの技として一括した。二様以上の読みがある場合は，なるべく慣用の読みに従った。読みが同じ場合でも漢字が違う場合は，異種の技として扱った。しかし，新漢字，旧漢字の違いは同一とした。原則として，漢字は漢字，ひらがなはひらがなをそのまま用い，出典に忠実に従った。ただし，その漢字の読みが難解で，ふりがなのあるものは，そのふりがなを採用したものもある。ひらがな，ふりがなを採用した場合など，現代かなづかいに従った。重複するものについては，可能な限り漢字を使用した。もう一つ注意した点は，文中にある技術の名称も出来るだけ収録するように努めたことである。この際，決まり手の収集のみに終止し技術の解説文としての記録は除かれた。明らかに組み手や，決まり手でないと思われる名称を決まり技として載せたものもあったが，それはその史料に従った。厳密には勇み足と腰くだけは決まり技ではないが，これを含めた。

その結果，表1に示したように656の相撲技術の名称が確認された。

表1　相撲技術名称一覧

あ	相合頭ひねり，あいこうぞり，相投，相引落し，相引廻し，あおり，あおり掛，あけぞり，あけどのしさり，あげぞり，あげまさづめ，足折掛，足搦み，足取り，浴せ倒し，虹の笹渡り，網打，網打捻り，居眼，居眼相，いきあい，居腰，居腰のくじき，勇み足，いし腰，泉川，出水川，磯打浪，磯の波，磯の波枕，居反，一寸返，一寸反，一足かけ，一足取，一体一生一ツ刎，一方掛，一本掛，一本立，一本背負，居投，いなし，いなす，入掛，入首，入替そり，入ちがい，陰陽の相，陰陽の構，浮足，うきそく負，受落し，うけ返し，うけそり，受たぐり，うけ投，牛弾，うしろこう，後亘，うたせ，うたせの手，うたせ捻，打返し，内掛，内搦み，内絡，内こまた，うちたて，打臥，内ぼうき，内無双，打棄，うつぼづけ，うつぼなげ，腕反，腕投，裏掛，裏がらみ，うらばね，上突張，上手縊，上手くじき，上手けかえし，上手すかし，上手反，上手出し，上手出投，上手突落，上手投，上手の入身，上手の逆捻り，上手捻，上手やぐら，上見ぬわし，上矢倉，えちごがけ，えちごひねり，えり渡し，えんこうぞり，猿猴のつたいあし，厭生反，えんづり，おい落，おいさばき，おいつかめ，負い投，大腰，大腰のひしぎ，大逆手，大さまた，大股，大渡し，大渡懸，小頭掛，送り出，送倒，押切，押倒，押出，押突放，押詰，おしなげ，落し，折入れ足，折返し，折倒し，折のかけ。
か	かいなすかし，腕反，腕なげ，腕捻，かいなまわし，かえりけ返し，抱投，抱出，抱え釣，かかりなやし，かき廻し，かけ一本立，掛入，かけくじき，掛反，掛け倒れ，掛投，掛の一本立，掛前後ろ，掛残，掛のほぐれ，かけひしぎ，掛もたれ，かけわたしだし，肩送り，片門，かたしき，肩透し，片手がらみつたへ出し，片手くぐみ，片手くぐり，片手枠，片輪車，合掌捻り，かっぱじき，鴨の入首，からす飛，からみ，がらみ，からみ出し，搦み投，からみやぐら，河津掛，蛙掛，蛙投，河津の掛の一本立，替り身，門，冠り，帰乗の足，擬宝珠，擬帽子反，きぬうり，絹かつぎ，衣かつぎ，きぬそり，極倒し，決倒し，極出，極捻り，逆投，逆捻，胸足詰，虚実の体，切返，きりひしぎ，縊かえし，挟込，縊なげ，縊ひねり，くさずりづめ，草押ひしぎ反，草摺だめ，草摺づね，くじき，挫き反，くじき倒し，朽木たおし，くじき出，朽木反，首抱え釣，首投，首の櫓投，頸叩，首捻，首櫓，縊込，蜘手別，車返，車反，くるまなげ，蹴網打，蹴腕絞，蹴返，蹴返の当，蹴逆手，蹴手操，下段構，下段の相，蹴爪，けはたき，け捻り，けんけん，けんとう釣出し，けんとう流れあし，こいのたき昇り，こうつき，小掛，呼吸入身，小頸，小腰，小腰のひしぎ，こざる廻し，腰入かえ足，腰返し，腰挫き，腰くだけ，腰車，腰投，腰のなみ受反，こしひねり，腰よつたへ，小鷹の羽折，骨法張，こつまどり，籠手落，小手返し，小手投，籠手捻，児の手柏，小膝まわし，小股，こまた返し，小股掬，こまたそり，こまたとめ，五輪崩，五輪砕，小腋，小渡懸，こんのふ。
さ	逆掛，逆附，逆手，逆手蹴返し，逆手投，逆とったり，逆やぐら，さぐり当，提出，さしくび，鯖折，さび矢，さまた，三股，さまた返し，さまたの入身，

	猿すべり，猿の一飛，左右捻，仕掛の体，しがらみ，敷小股，鴫の羽返，錣投，四肢の一足横なぐり，四肢の入身，四肢の総まくり，獅子の谷のぞき，四肢の歯噛，獅子のはからみ，四肢のはり身，下手かがり，下手出投，下手突落，下手飛反り，下手投，下手の逆捻，下手捻，下手櫓，下手矢倉，下手櫓投，下矢倉，忍び釣り，芝返し，芝引，撞木反，しゅもくなげ，上段構，上段の相，すかし，すかしひねり，すがり，掬投，すじかえがけ，裾返し，裾取り，裾払，無手，すて身，頭捻り，せおいこみ，折虚の入身，そくぎれ，足とめ，そくび，素首落し，そくびかえし，素首投，そこえん，袖返し，袖摺，外掛，外搦み，外絡，外小股，外襷反，外ぼうき，外無双，備崩し，そり，そりだし，そり捻り。
た	高足，高捻，高無双，抱き出し，抱廻し，手繰，手操掛，たぐり蹴，手繰蹴返，たぐりこみ，たぐりとあし，出し，出し投，たしの手，だしの三所，出し捻，たすきおい落し，たすきがけ，襷反，たすき投，たすき横投，たたきよせ，立居返，立居腰，立居そり，立眼，立眼相，たぬきの腹投，手房取，撓出し，袂の下反，中反，中投，中段構，中段の相，ちょうちんだたみ，手斧掛，つかみあげ，つかみ投，つかみやから，突落，突倒，突出，つきたて，つきで負，突放し，つきみ腰，つき櫓，附込み，辻搏，つたへ足，伝掛，伝反，伝え投，つつき返し，つつき蹴返し，突張，つつり込み，爪取り，褄取，つまそり，つみの大ごころ，つめ，つめ小足，つりあげ，吊落，吊倒し，吊出，釣出，吊投，釣投，吊放，吊寄，手合見競勝負の初，手斧，手くだき，手ぐみ倒，手車，手さばき，鉄砲，手四つ，てんこう反，外足，外足飛反，胴つき，胴捻り，徳利投，取足り，飛かけ，飛反，飛違，飛投，土俵まわし，土俵わたり，土俵渡りのそく，留反，取手の崩し，とんぼうかへり。
な	投げ，投残，投のこり押切，投の摺腰，投の三所，投の三所詰，なげわたし，鉈，なたがけ，鉈の押切，なまずの水離，浪枕，なやしの手，なやしひねり，逃身，二足掛，二足投，二丁投，二挺投，二枚蹴，ぬき上げ，抜上げこ足，ぬきこまた，抜込み，抜襷，寝そり，ねちまわし，のこり，のこりとまり，喉附，喉輪，喉輪攻め，喉輪づめ，のび運び，のぼりおさえ，登り掛，のぼりくしき，乗り足，乗りくじき。
は	はぐき落し，挟み出し，走亘，はすの葉返し，旗折返し，叩込，はね，趁，はね押切，はね返し，はね掛，はね搦み，はねそり，はね出し，はね投，はねの受身，羽ふしそり，はぶしそり，腹くじき，腹くじり，腹投，腹やぐら，波離間投，引あげ，引送り，引落し，ひきおとしつめ，ひき返し，ひきこまた，引すえ，引捨，曳捨，引擢投，ひきそり，引倒し，引投，引廻し，曳廻し，引廻しと足，引廻の入身，膝おし，膝車，瓢廻し，膝小まわし，膝反，膝やぐら，ひしぎ，ひしぎ反，ひしぎ出，ひしぎ投，引掛，ひねり，捻返，ひねりぞり，捻倒，皮肚取，ひりうそく，鬢廻し，奏者とり，仏壇返し，ふみきり負，ふみきりそく負，ふみこし負，ふみこしそく負。
ま	前附蹴返，前附釣投，前附捻，前引片男浪，前亘，紛突出，捲落し，巻かえ，

	枕腕反，待請，水掛，水車，みず離れ，三所掛，三所攻，三所詰，向搦，向反，向附，こうひねり，無相，無相出し，無双とまり，むそう捻，胸反，無名の構，胸投，胸櫓，馬手草擢返し，め手やがら，もじりがけ，もたれ掛，もたれこみ，もたれなげ，もたれの入身，もたれの体，持込，持出し，本手なげ，もとづめ，もろてくぐり，双手投，双手の爪取，双手捻，諸捻。
や	矢柄，やぐらかけ，矢柄投，櫓，やぐらかけ，櫓投，やぐらだし，矢筈攻，行合い，行下力草，雪の下そり，夢枕，揺戻，弓手返，弓手やがら，よこだおし，横矢筈，四違，四手おとし，四手崩，四ツ手蹴返し，四手すかし，四ツ手なげ，寄って投，四ツ手のつめ，四ツ手初り，四ツ手腹投，四ツ手捻り，四ツ手持出し，四手もどき，四身つがい，呼掛，呼戻，寄押切，寄切，寄相，寄反，寄倒，寄出し，寄突出，寄突放，寄りもどし，寄投。
ら・わ	両ため出し，脇合，脇ぬけ，わく抜，分身，鷲のつかみあがり，鷲の羽落，渡掛，渡込，渡しと足，渡り足，渡り掛，亘掛，輪違反，割出。 (計656手)

従来から，相撲の技術を手と称して，四十八手など呼ばれていた。その手数として，四十八手（源平盛衰記），百手ばかり（節用集・竹齋物語），手捌八十二手，手砕八十六手合して百六十八手もあり（相撲大全），さらに百五十技にも二百技にものぼるだろう（相撲道綜鑑）などとある。そのなかで，数えるとざっと三百を越えるだろうとする説（雑誌「相撲」・大百科辞典）が定説のように思われる。

ここに収録された手数は，656に及び，定説の2倍以上となっている。その点で，非常に興味深い。さらに古今の相撲解説書に当ればまだまだ多くなるはずである。前に述べたように，同一の技であっても，呼称が違っていたり，表記された漢字が違っていたりした場合は2つ以上に数えたので，重複が多く，純粋に相撲の技術数そのものを指しているとは言えない。また技術論から厳密に再分類すれば，おおよそ300内外になると予想されるが，あえてここでは行なわない。しかしながら，この656の技，相撲の手，相撲技術の名称は，ひとつ一つにそれぞれ含蓄があり，先人の感性が偲ばれ興味が尽きない。言い方を換えれば，複数の呼称を唱えたその時代的な背景に興味を感じる。さらにこれらを民族の文化的遺産として考えた場合，警きを通り越して畏敬の念さえ禁じ得ない。

相撲技術名称の変遷

ここで収録された相撲技術の名称は，656であった。1,744手のうち1,088手・62.4%が重複していたことになる。最も多くの出典の中に出て来たのは“肩すかし”である。その出典数は17に及ぶ。次下同様に“撞木反”の16，“掬投”“内掛”の15，“丁斧掛”“外掛”“腕捻”の14，“掛投”“頭捻”の13，“負投”“掛反”“首投”“大渡”の12，“波離間投”“外無双”“内無双”“突落”“巻落”“上手投”“鴨の入首”の11，“つま取”“河津掛”“飛違”“蹴返”“下手投”“居反”の10となる。

この26の技のうち，現在の決まり手70に残っているのは22の技である。残っていない技は“負投”“大渡”“鴨の入首”“飛違”の4つである。これらの技の違いを考えると技の内容と技の名称の結びつきの弱さなどが直感的に挙げられる。しかし，現在の決まり手に残っているものの中にも“撞木反”“掬投”“丁斧掛”“波離間投”など，名称からすぐに技のイメージの浮かばないものもある。技術論的に考えて，技の形が確立していることがあげられよう。

出典数で重複しない技，つまり1回しか出て来なかった特殊な名称を持った技の数が表2に示された。“新猿楽記”“山家集”“古今著聞集”“異本曽我物語”“異制庭訓往来”“節用集”“竹齋物語”そして“手捌八十二手”“手砕八十六手”“上覧相撲記”に注目した。比較的年代の古い時代の技術名称に特殊なものが多いのは，技術的にもまだまだ未分化で，相撲競技の成長・発達段階と考え合わせると理解出来なくはない。時代も下り，江戸の“手捌八十二手”や“手砕八十六手”“上覧相撲記”では，行司を中心とする流派や部屋などが対抗意識を持ち，お互いに研究，切磋琢磨してその結果が，膨大な技数になり，記録に残ったと考えられる。名称からみて江戸時代の中期は，相撲のもっとも隆盛を極めた時代の1つと言えるだろう。名称から技にあたりがつかないのも1つの特徴である。相撲道綜鑑や日本相撲協会資料の中にも現在使われていない非常に特殊の名前が多いのも，1つはそれらの過去の名称をも収集するという命題に原因があると思われる。

表2　特殊名称数（%），動詞終了名称数（%），動詞を含む名称数（%），動詞のみの名称数（%）とその出典名

No.	出典名	成立年代 a, b, c, d	術技数	特殊名称数（%） a	動詞終了名称数（%） b	動詞を含む名称数（%） c	動詞のみの名称数（%） d
①	新猿楽記	永承7・1052年ごろ	⑥	③	③	③	①
②	山家集	治承2・1178年ごろ	②	①	①	①	
③	古今著聞集	建長6・1254年	①	①	①	①	
④	源平盛衰記	鎌倉末・1300年ごろか	⑤	②	⑤	⑤	
	①②③④合計		14	※7 (50.0)	※10 (71.4)	※10 (71.4)	1 (7.1)
⑤	異本曽我物語	鎌倉末～室町初・1400年ごろか	17	※15 (88.2)	14 (82.4)	16 (94.1)	3 (17.6)
⑥	異制庭訓往来	来南北朝後～室町初・1400年ごろか	②	②	②	②	
⑦	節用集	室町中期・1480年ごろか	12	※7 (58.3)	10 (83.3)	11 (90.9)	※6 (50.0)
⑧	竹齋物語	元和7～9，寛永13ごろ・1636年ごろ	⑨	⑥	⑥	⑤	①
	⑥⑧合計		11	※8 (72.7)	※8 (72.7)	※7 (63.6)	1 (9.1)
⑨	相撲強弱理合書	延宝年間・1673～1680年	49	7 (14.3)	※35 (71.4)	43 (87.8)	14 (28.6)
⑩	南部相撲取組	延宝4・1676年	126	22 (17.5)	※95 (75.4)	110 (87.3)	37 (29.4)
⑪	身構五種取組	宝永元・1704年	119	20 (16.8)	※94 (79.0)	105 (88.2)	37 (31.1)
⑫	相撲伝書	享保年間・1716～1735年	15	2 (13.3)	12 (80.0)	15 (100.0)	※8 (53.3)
⑬	相撲鬼拳	宝暦年中・1751～1763年	56	14 (25.0)	49 (87.5)	50 (89.3)	7 (12.5)
⑭	相撲大全	宝暦年間・1751～1763年	146	25 (17.1)	121 (82.9)	124 (84.9)	28 (19.2)
⑮	〃（抛力秘要録）	〃	63	14 (22.2)	※50 (79.4)	57 (90.5)	20 (31.7)
⑯	〃（手捌八十二手）	〃（寛政も）	82	※44 (53.7)	68 (82.9)	75 (91.5)	30 (36.6)
⑰	〃（手砕八十六手）	〃（寛政も）	82	※59 (72.0)	※52 (63.4)	69 (84.1)	16 (19.5)
⑱	相撲図式	安永年間・1772～1780年	60	10 (16.7)	49 (81.7)	52 (86.7)	23 (38.3)
⑲	上覧相撲記	寛政3・1791年	49	※24 (49.0)	48 (98.0)	49 (100.0)	※30 (61.2)
⑳	相撲隠雲解	寛政5・1793年	50	3 (6.0)	43 (86.0)	44 (88.0)	22 (44.0)

㉑	日本相撲奨励会	大正2・1913年	46	0 (0)	37 (80.4)	38 (82.6)	14 (30.4)
㉒	大正の四十八手	大正年間・1912～1926年	48	2 (4.2)	40 (83.3)	43 (89.6)	15 (31.3)
㉓	一味清風	大正13・1924年	59	3 (5.1)	48 (81.4)	50 (84.7)	28 (47.5)
㉔	相撲新書	昭和3・1928年	46	1 (2.2)	37 (80.4)	40 (87.0)	14 (30.4)
㉕	相撲道綜鑑	昭和15・1940年	144	26 (18.1)	118 (81.9)	124 (86.1)	56 (38.9)
㉖	すもう	昭和49・1974年	72	0 (0)	67 (93.1)	68 (94.4)	33 (45.8)
㉗	アマチュア相撲	昭和57・1982年	78	2 (2.6)	72 (92.3)	73 (93.6)	34 (43.6)
㉘	真説相撲見聞録	昭和62・1987年	73	1 (1.4)	68 (93.2)	69 (94.5)	31 (42.5)
㉙	日本相撲協会資料	現在	155	28 (18.1)	136 (87.7)	141 (91.0)	62 (40.0)
㉚	青少年の相撲指導要綱	現在	72	0 (0)	67 (93.1)	68 (94.4)	31 (43.1)
		合計	1,744	344 (19.7)	1,448 (83.0)	1,551 (88.9)	601 (34.5)

○印数字は合計して処理され，※印数字に注目した。aはP<0.01，b・c・dはP<0.05で有意。

相撲の技術名称が動詞形で終了した数，そして動詞を含む名称数，動詞のみの名称数が同じく表2に示された。統計的な有意さが確認され，時代が下るにつれて，動詞が決まり技に大きく関わった傾向がうかがえる。1つの技術を表わす時，あるいは，複数の技術を比較する場合に，動詞の持つ役割に多大なものがある。修辞的な表現が有効な場合もたくさんあるだろう。また現に，数多く収録されている。しかし，現在では少なくなっており，この背景には，修辞的な表現は余程適切でないかぎり普遍性を欠くことがあげられる。一例を挙げれば，“押し出し”と“押し倒し”を較べた場合，殆ど相撲を知らない人でもこの違いは理解できるであろう。しかしながら，個人名がそのまま技術名として残っている“さまた”“泉川”“河津掛”となると余程の相撲通でないと解らない。

相撲技術名称の変遷を考える時に，比較的年代の古い文献“山家集”と“節用集”に注目した。1つは歌に詠われた相撲の手に，1つは辞書に現われた相

撲の手として興味がある。

個人名称の技

相撲技術の名称の中に個人名が残っているものが3つ収録された。1つはさまた，1つは泉川，もう1つは河津掛である。

さまたは，「相撲大全（四十八手分別）」に次の様に解説されている。“さまた（又）この手は，いずれの時にかありけん。唐土より大さまたという者，日本に来り。数多の相撲を取りけるが，この大さまた，手合するとひとしく，右の手にて，多くの人をなげころせしより，この手はじまる。しかるに，鎮西十郎朝長という者あり，生年十八歳にて，この大さまたに勝ける由いい伝う。”とある。これによれば，大さまたの掛けた“さまた”からこの技が始まったとある。「相撲大全」の他に「南部相撲取組」「相撲大全（手捌八十二手）」「大正時代の四十八手」「相撲新書」「角觝畫談」「アマチュア相撲」などにこの技を引用して掲載している。技術的には，組んだ相手を股を支点として切り返して仰向けに投げる技である。字としては“又”“三股”“小股”を当てている。このさまたの変化技として，外さまた，さまた返し，大さまた，さまたの入身などがあげられる。さまたを小股の字を当てれば，小股反，小股掬，外小股，敷小股，小股，内小股，引小股，小股返し，小股とめ，など，多数になる。漢字を当てた場合には，慣用として“こまた”と読む事が多く，わずかに“さまた”とかな書きの場合のみ，唐土の人，大さまたと知る事が出来る。

相撲技術名の泉川は，出水川という相撲取りの得意技から来ている。撓出（ためだ）しと呼ばれる技の事である。出水川や泉川の字が使われている。解説によれば極め出し，片かんぬきの様に，相手の腕を極めながらジワジワと押出す技である。「日本相撲史・上」に，三人の出水川が登場して来る。1人は出水川貞右衛門で，薩州の生れである。最初は飛火野と言った。体格は均整がとれており，体重は約100 kg。後に大関にまでなった。左差しが強く，たびたび谷風を破って大いにその名をあげた。もう1人は出水川林右エ門。薩州の生れで，出水川貞右エ門の甥に当り，また弟子でもあった。同じ出水川でも，こ

こで言う技の出水川とは関係がない。3人目は，天津風雲右衛門の名前であるが，出水川貞右衛門を後に改めた名前である。史実に明らかなように，明和年間から安永年間（1764～1779）の時代に活躍した出水川貞右エ門または天津風雲右衛門が，谷風に掛けて負かした時の技を，出水川と呼んだ。出水川が全盛の頃，谷風と5勝5敗と互角に戦っていたが，その後は6連敗して1回も勝っていない。谷風と通算5勝11敗であるが，この対戦成績で一世を風靡して技名として名前まで残るとは，逆に，谷風の強さや人気が彷彿される。出水川（天津風も含む）の総取組数は138で，勝83，負23，預10，引分18，無勝負4となっている。近年では，第16代横綱初代西の海嘉次郎が良くこの手を使い，西の海関と呼ばれないで「泉川関」と呼ばれたとある。二人ともに鹿児島県出身のところが，何とも興味深い。

河津掛は，現代の相撲70手の中にも残る，もっとも有名な，もっとも息の長い技の1つである。古くから相撲の名勝負として挙げられるのは野見宿禰と当麻の蹴速との勝負である。もう1つとなると河津掛の河津三郎と俣野五郎の名勝負であろう。安元2年（1176年）伊豆国柏峠で，当時の相撲の名手であった武将・河津三郎祐泰が，工藤祐経の家臣・股野（俣野）五郎景久を相手に相撲をとり，この時“河津は股野が上帯をむずとつかんで前へひき寄せ，妻手へ回して目より高く差し揚げ，股野が足を延ばして河津の股に纏ひつくを，河津事ともせず，一反りして尚高々と差し揚げ，しばし保って片手を放ち真中に進んで横さまに投げ倒す”とある。股野が河津に技を掛けているが，河津掛の起源はこれである。その後，この物語は，父，河津が暗殺されその仇討ちを曽我兄弟が成し遂げるところまで続く。悲劇の主人公，五郎十郎の曽我兄弟の曽我物として広く人口に膾炙してゆく。また，“正しう河津が勝ったゆゑ，今に伝へて河津掛けといふ相撲のてありと，小姓共の語りしに”や，“夜相撲にとる手や月の河津掛”さらに歌舞伎の演目「河津掛曽我本説」などに到り，相撲技術の名称として定着して来た。古くからある“蛙投（かわずなげ）”“蛙掛（かわずがけ）”“蛙の一本掛（かわずのいっぽんがけ）”の手が，河津，股野の相撲の手を境に河津と蛙を引っ掛けて名称の上で“河津掛”に変遷して行ったと考

えられる。

山家集の相撲の手

「山家集」からは，２つの相撲技術が引用された。その技術名は，“あけどのしさり”“かものいりくび”である。「山家集」は西行（1118～1190・元永１～建久１）の家集，歌集である。成立年代は治承２年（1178年ごろ）とされている。西行は，和歌に優れ，故実に通じた武士として知られていたが，23歳の若さで突然に出家して，草庵生活に入った。自然に親しむその中から約2000首の歌が伝わっている。多くは月・花・桜など四季，自然を歌っているが，下の巻雑の編では題しらずとして次の和歌がある。収録した本により多少の違いが見られるが，ここではその吟味をしないでそれらを忠実に引用すると次のようになる。

「もののふの　ならすすさみは　おびただし
　　あけそのしさり　かものいれくび（渡辺版）」
「もののふの　ならすすさみは　おびただし
　　あけそのしさり　かものいりくび（渡辺版）」
「ものゝふの　ならすすさひは　おひたゝし
　　あけとのしさり　かものいれくひ（桑原版）」
「ものゝふの　ならすすさみは　をひたゝし
　　あけそのしさり　かもの入くひ（桑原版）」
「ものゝふの　ならすすさびは　おびたゞし
　　あけとの志さり　かもの入くび（古事類苑）」

訳は渡辺の説を採用して引用すると，「武士が訓練する術はおびただしくある。あけどのしさり，かものいりくびなどはその一例である。」とある。注釈があり，あけどのしさり，かものいりくびについて，流布本の「あげどのしさり」にしたがえば，「戸をおしあげて，その瞬間にあとへ引きさがる技」。かもの入くびは，互に腋の下に首を入れてもみあう技としている。

西行法師は，出家する前は，武士で，出家してからもよく武家に出入りして

おり，武芸の素養のあった事が窺われる。相撲についてもかなり長じた所があると思われ，それが専門的な相撲の手として和歌に詠まれたとみた。しかもこの技が，難解なものとか，西行個人の命名したものでなく，かなり一般的に知れ渡っていたと見ることが出来る。ここでは他の出典に“あけどのしさり”を見つけ出す事は出来なかったが，解説の言う他の流布本にはこれを見つけることが出来るのであろう。鴨の入首に到っては，非常に一般的である。「山家集」の成立年代もはっきりしており，一級の史料として位置づける事が出来る。これらの事より，平安時代の末期，源平時代には，かなり多くの相撲の技術が盛んに行なわれていたと推察される。

節用集の相撲の手

「相撲大鑑」に，“相撲の手といへば，従来四十八手と言いならわしあれど，相撲の手必ずしも四十八手に限られたるにはあらざるべし。「節用集」相撲と題する条下に，相撲は，肩洗，負拋，反張，落，蛙股，櫓，爪取，突出，趁搦，無手，骨法張，杯申候，四十八手と申候へども，百手計も御座候。殊更臨機応変の働，気慎第一の由，聞及候，剛力無双に而も，甚速気りて手出仕候へば，必負に成候由。角力は，遅如魯如と申が能候よし”。と振りがなも含めて142字の記載がある。相撲の技術は11手数えられる。雑誌「相撲」には，肩洗，負拋，反張，蛙投，櫓，爪取，突出，はね，搦，無手，骨法張の11の技が出て来る。同じ11の技でも内容が違う。一方には落があり一方にはない。また一方は趁搦が一緒だが，一方でははね，搦に分かれている。「古事類苑」によれば，肩洗，負拋，反張，落，蛙投，櫓，爪取，突出，趁，搦，無手，骨法張の12手が記載されている。

これらの違いを明確にするためには，その出典とする「節用集」の原本に当らねばならない。

「節用集」は，室町時代中期，文明年間（1469～1487）を下らないころに出来た，いろは引きの国語辞書である。ただ単に「節用集」と言っても“いろは”のいの部が伊勢で始まる伊勢本なのか，印度で始まる印度本なのか，ある

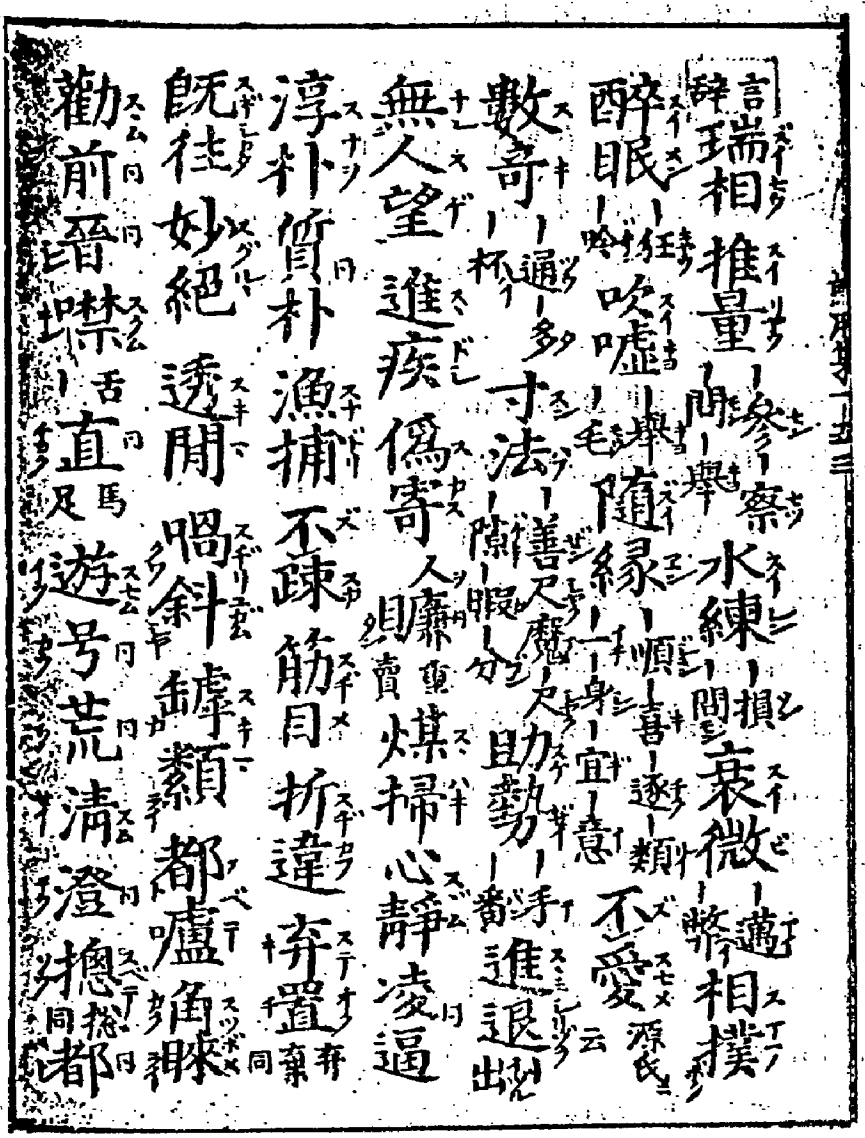

図1 「易林本節用集」右下に相撲の文字が見える。

いはいぬいで始まる乾本なのかわからない。まずは丹念に見るしかない。「節用集」の構成は，「易林本節用集」を例にとるとすは寸で始まり乾坤，官位，人倫，支躰，気形，食服，草木，器財，名字，言辞，と項目が続き，その項目ごとにすで始まる漢字が並べてある。漢字の下に漢字の用法や意味を補足してあるものもある。図1のように相撲は言辞の項目にあり，スマフ，ボクと漢字の左右に振りがながつけてある。以下に「節用集」の種類，成立年代等と，相撲についての記載を示した。

○文明本節用集（明応五年本にも先だつ）「撲，相撲」

○明応五年本節用集（伊勢本）「相撲」

○温故知新集（室町中期書写）「相撲」

○頓要集（室町中期書写）「相撲　和名○○○」

○伊京集（室町時代書写）伊勢本「相撲」

○弘治二年本節用集（室町末期）川瀬一馬著，「相撲」（２カ所あり）

○善本叢書節用集二種（天理図書館）印度本「相撲」

○永禄二年本節用集「相撲」

○運歩色葉書（室町末期書写）「相撲」

○饅頭屋本節用集（室町末期）伊勢本「相撲」

○黒本本節用集（室町末期）印度本「相撲」

○天正18年本節用集（伊勢本）記載ナシ

○大谷大学本節用集（天正20年本）伊勢本「相僕」（撲か）

○易林本節用集（慶長２年原刻本）乾本「相撲」

○恵空編節用集大全（延宝八年・1680年）「角觝，相撲」

○書言字考節用集（元禄11年）槇島昭武著「角觝（捐南）相撲也（漢書注）相撲本朝始レ自ニ垂仁帝一時見（日本記）」

○撮壌集（江戸中期書写）「相撲内取事　相撲抜出事　相撲召合事」

○堯空本「相撲」

このように見ても，相撲の項目の下に，技の解説をしたものは見当らない。わずかに「書字考節用集」や「撮壌集」「頓要集」などに，文字の用法や歴史などに触れられている程度である。この種の「節用集」ではないように思われる。

永代節用集

江戸時代に出された「節用集」に「永代節用無尽蔵」がある。いろはに始まり京で終る順序は同じである。項目として乾坤，時候，神祇，官位，名字，人倫，支躰，食服，器財，気形，草木，言語と続いている。通常は行の右側に行・草書体で太書された漢字があり，左側に楷書体漢字が並んでいる。それぞれにその右側あるいは左側に読みがなが振ってある。その下に漢字の用法，意味などが載せてある。“す”は寸，スで始まり，言語の項目に相撲がある（図２）。

相撲・すまふ，すまいとも。相撲・サウボク，ウツ。角力・すまふ，アラソフチカラ。角觝・すまふ，ツキシラフ。とある。スペース的には，他の項と比較して決して短くもなく，長くもない。相撲の項は約40字で，漢字は7字である。「相撲大鑑」等のさす「節用集」の140字以上，しかも80字以上が漢字から成る技の紹介，力士心得を，同じようにこの欄に載せる事は無理があると思われる。

図2 「永代節用集・嘉永2年本」
中央に相撲の文字が見える。

この「永代節用無尽蔵」には，用語便覧的な機能の他に百科辞典に類した機能も持っており，それに多くの頁と，多くの頭書スペースを割いている。ごく一部ではあるが彩色したページもある。巻首標目，頭書之部，奥書之部に分け，約150の事項を図などを使い解説している。主なものは，十干之図並弁，十二支之図並弁，世界萬国之図並弁，三十六歌仙，当世料理献立などがある。その中に，“和漢禮楽之事並虚実之弁”として，神楽，相撲，歌舞伎，狂言などを解説している。相撲の所では，見開き2頁を使い，下半分に勧進相撲の興業風景の絵を入れ，上に次の文を載せている（図3）。

“相撲は，人王十一代垂仁帝七年，出雲国野見宿称，大和国当麻の蹴速と其力量を争ひ倶に相撲て力を競ぶるに始り，是より禁庭行事の一ツとなりて小鳥使とも称す。中頃鎌倉において相撲の沙汰あり。畠山重忠海老弘綱河津保安朕野景久が輩，頼朝の前にて大いに其力を競べしより泰平の御代に武を励むの一ツとはなりけらし。然るに近世初代の谷風二代目の谷風などはその力，千人の上にあって力士と称すにたへたり。その谷風に実を似って勝ず虚を似って勝をり始めしは，堺の八角なり，是よりしてすもうの道も一段下りて已が力をもっとて勝事を要せず。相手の虚をはかって勝をとるを専一となすことはなりたり。”

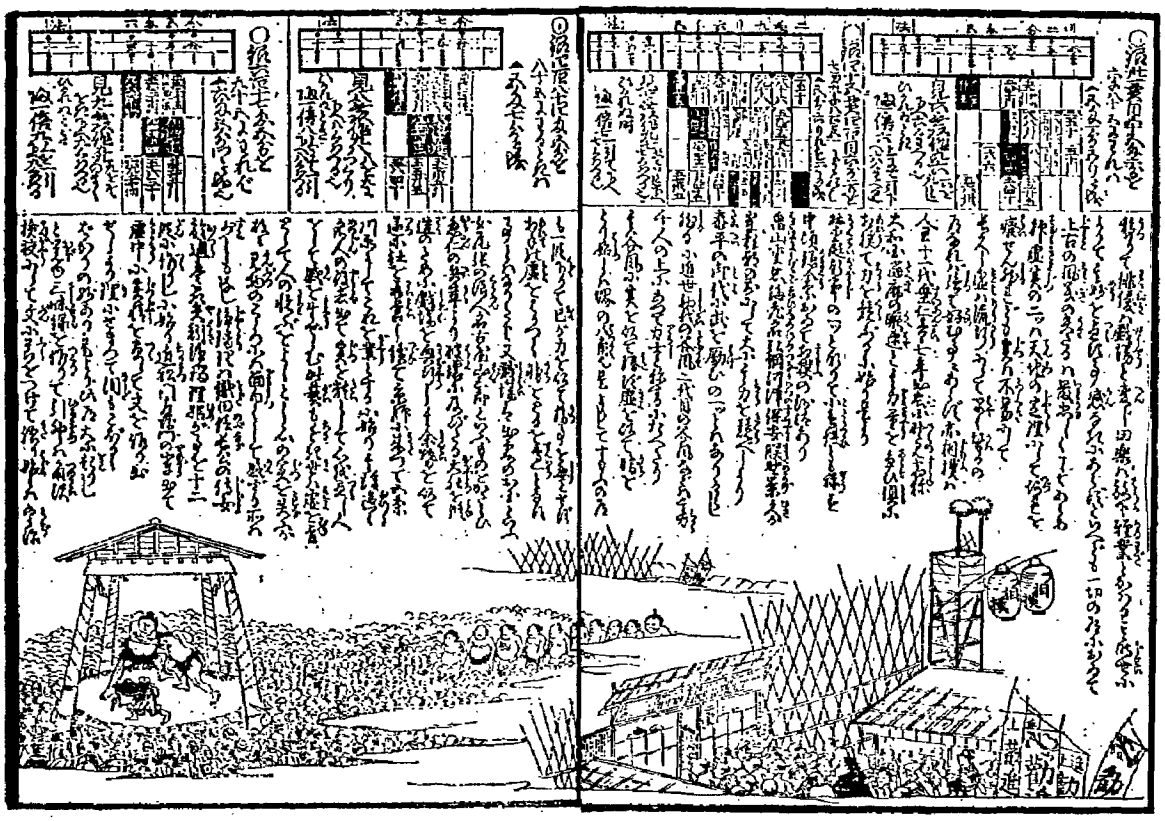

図３　嘉永２年本「永代節用無尽蔵」諸芸虚実の事・相撲（上巻96，97ページ）

とある。ざっと300字はある。これなら前述の「相撲大鑑」の引用した「節用集」の技の紹介，力士心得も十分に掲載できるし，技名の違いなども吟味できる。「節用集」の数は180種以上にのぼると言われている。おそらく，「永代節用」の様な百科辞典様式の「節用集」で，しかも，その本文中ではなく，巻頭付録部分などに解説されたと見られる。

江戸版節用の可能性

同じ「永代節用無尽蔵」でも出版された年で大部形式も内容も違ってくる。新版本は天保２年（1831年）に出版され全１巻であった。再版本は嘉永２年（1849年）に出され，上巻下巻の全２巻である。文久４年（1864年）版の奥付に，第四版とあり，これも全２巻である。この奥付に従えがば，元版が初版で寛延３年（1750年）・新版が２版，再版が３版となる。年代差は，初版から２版が81年，２版から３版が18年，３版から４版が15年となっている。４版，３版が全２巻，２版が全１巻のところを見ると初版本も全１巻と思われる。

表3　土俵成立以前の相撲の技術

出典名（成立年代）	相撲技術に関する記述	相撲技術の名称	技術数
新猿楽記（永承7・1052年ごろ）	（相撲の手）上手なり。手合。	内搦，外搦，亘繋，小頸小脇，逆手。	6
山家集（治承2・1178年ごろ）	ものゝふの　ならすすさびは　おびたゞし　あけとのしさり　かもの入くび	あけとのしさり，鴨の入首。	2
古今著聞集（建長6・1254年）	これによりて，腹くじりとぞいいける	腹くじり。	1
源平盛衰記（鎌倉末・1300年ごろか）	（21・小坪合戦事）東国無双の相撲の上手，四十八手の取手に暗からずと聞ゆ。	内搦，大渡，外搦。	3
〃	（32・惟高惟仁位論事）	内搦，外搦，大渡懸，小渡懸。	4
異本曽我物語（室町初・1400年ごろか）	すまい手共，其数を盡し……。向突，臂つき。押しすえ蹴倒し投げ倒す。たちどころに三十二番ぞ打ちたりける。	内搦，外搦，向搦，入搦手斧，掛入，蹴爪，蹴逆手，蹴腕絞，前亘，後亘走亘，小頭掛，手房取，胸反，辻搏，皮肚取。	17
異制庭訓往来（室町初・1400年ごろか）	四十八手の取手。入相撲懸相撲，踢相撲。	内絡，外絡。	2
節用集（文明年間・1480年ごろか）	四十八手と申候へども，百手計も御座候。	肩洗，負拋，反張，落，蛙投，櫓，爪取，突出，趁，搦，無手，骨法張。	12
竹齋物語（寛永13・1636年ごろ）	四十八手のその内をもゝて（百手）にくだきて取ったりける。	さまた返し，よこだをし，入くび，さしくび，はね返し，大ごし，もとづめ，むかふづき，くるまなげ。	9

第2版，第3版，第4版を通じて，本文中の相撲に関しては，いささかの変化もない。2版の天保本に本文中を除いて相撲の解説記事はない。ただ，巻頭付録の年中祭祀行事之図中，勧進相撲興業の小さな絵が八月の欄にあり，“朔

日京神泉苑祭松尾社神事角力。同藤森神社にも有”と角力の文字があるだけである。第3版の嘉永2年版には，前に述べたように相撲についてかなり詳しい解説を行っている。しかし第4版の文久4年本には，もはや本文中を除いて，祭礼行事欄の神事角力の記事のみとなり，勧進相撲の絵もなくなってしまう。「永代節用」の2，3，4版に限って言えば，第3版の嘉永2年本が，相撲に関して最も詳しい。このように，同じ「節用集」でもその版によって体裁，形式内容がまるっきり違って，異種の本かと思われる程である。常に時代背景を考えて，読者の好み，読者の要求する節用集を出し続けた出版元の努力感じがられるとともに，その時代その時代の相撲への係りを知ることが出来る。

この「永代節用無尽蔵」の相撲に関する記事を一例として，3版，4版にある事柄もその初版にあるとは限らない事を示した。「相撲大鑑」に引用された「節用集」，相撲技術数の吟味は，室町まで遡らなくとも，案外江戸の初期，あるいはもっと時代が下れば中期ごろで出来る可能性もある。

比較的古い時代の史書等に表われた相撲技術の名称を表3に示した。土俵の成立が1661～1716年ごろとされているから，いずれもその前のものである。この中で，「節用集」の技術名称に注目して見ると，技術数は決して多くないが，非常に洗練された，系統だった配列になっているのに気づく。「節用集」という辞書としての性格からか要領よくまとめられているのも当然といえば当然である。江戸時代にその分類が完成されたとする四十八手の反，捻，投，掛の技が全て含まれている。さらに注目されるのは，土俵成立以後に考えられた攻め技の“突・出”も含まれていることである。表2の中で「節用集」以外には攻め技は含まれていない。古名が多いために，絶対的な断言は出来ないが，少なくとも押，出，寄，突，吊，割，倒などの文字は見えない。もしかすると“無手”，“骨法張”も，あるいは土俵に関係がある技かも知れない。

土俵がすでに成立したと見られる頃から，持出し，無相出し，寄投，ため出し，くじき出し，出し捻り，はね出し，くじき倒し，などの技が多く見られるようになる。この様な考え方を支持すると，「相撲大鑑」に引用された「節用集」は土俵成立以後に出版されたものを指しているのかも知れない。

要　　約

古今の相撲技術名称を30の文献から656手収録した。従来からの定説である約300手を2倍以上も上回る興味ある集計がなされた。

現在まで残っている名称の中でも難解な修辞的表現のものもあるが，それらは技術論的に技の形が確立している可能性が指摘された。相撲技術名称の消長から見て，江戸時代の中期はもっとも相撲の盛んな時代の1つであると位置づけられる。相撲技術名称の動詞形含有率は，時代が下るにつれて多くなる傾向にあった。逆に特殊名称は少なくなる傾向にあった。

個人名が残る“さまた”“泉川”“河津掛”について注目し，解説をした。

西行の「山家集」に“ものゝふの　ならすすさびは　おびただし　あけとのしさり　かもの入くび”このことから，平安末期・源平時代にかなり多くの相撲の技術が行なわれていたと推察した。

「節用集」にある相撲の手数を吟味する際，その「節用集」は室町版まで遡らなくとも，江戸初期版，あるいは中期版で良いとする可能性を指摘した。スペース的に見て，本文中ではなく「永代節用」種の巻首，頭書，奥書とする見方，あるいは“突出”の技名から，土俵成立以後とする見方がもう1つの根拠である。

参　考　文　献

1）「相撲の歴史」池田雅雄，平凡社，昭和52年。
2）「日本相撲史，上」酒井忠正著，大日本相撲協会発行。ベースボール・マガジン社。昭和31年。
3）「江戸時代の大相撲」古河三樹著。国民体力協会発行，中興館。昭和17年。
4）「相撲道綜鑑」彦山光三著。国民体力協会発行，中興館。昭和15年。
5）「相撲五十年」相馬基著。時事通信社。昭和30年。
6）「相撲故実」伊藤常足編，花田七五三訳註。新光社。昭和37年。
7）「真説大相撲見聞録」石井代蔵。新潮社。昭和62年。
8）「大相撲」高橋義孝・北出清五郎。平凡社。昭和52年。
9）「力士を診る」林盈六。中央公論社。昭和54年。
10）「アマチュア相撲」藤川誠勝，塔尾武夫，小川光哉，野田雄二，太田平二。技興

社。昭和57年。
11) 「相撲百年」相馬基。時事通信社。昭和51年。
12) 「すもう」平間光雄，塔尾武夫。大修館書店。昭和49年。
13) 「日本相撲史」横山健堂。富山房。昭和18年。
14) 「西行山家集全注解」渡部保。風間書房。昭和46年。
15) 「西行全歌集（上）」桑原博史編。新典社。昭和56年。
16) 「西行全歌集（下）」桑原博史編。新典社。昭和57年。
17) 「古事類苑」武技部。吉川弘文館。昭和60年。
18) 「河津掛について」真柄浩。明治大学教養論集200号。昭和62年。
19) 「図書総目録」岩波書店。昭和42年。全８巻。
20) 「青少年の相撲指導要綱」日本相撲協会。昭和60年。
21) 「角觝盡談」栗島狭衣，鰭崎英明。教学院書房。昭和４年。（復刻版相撲名著選集。ベースボールマガジン社。昭和60年）
22) 「相撲新書」上司延貴。博文館。明治32年。（復刻版相撲名著選集。ベースボールマガジン社。昭和60年。）
23) 「江戸時代の角力」三木愛花。文教書院。昭和３年。（復刻版相撲名著選集。ベースボールマガジン社。昭和60年）
24) 「一味清風」綾川五郎次。学生相撲道場設立事務所。大正13年。（復刻版相撲名著選集。ベースボールマガジン社。昭和60年）
25) 「相撲大鑑」常陸山谷右衛門。民友社。大正３年。（復刻版相撲名著選集。ベースボールマガジン社。昭和60年）